神の力と血を継ぐ者

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神の力と血を継ぐ者

【Ｎコード】
Ｎ７３４４Ｊ

【作者名】
ユウ

【あらすじ】
友との誓い果たせなかった約束。神の力と血を継ぐ少年の物語。
※オリ主最強、ご都合主義、多重クロス、独自設定、ハーレムその他もろもろおりこまれてます。ネギまがメインでＦａｔｅシリーズ、テイルズシリーズはキャラクター、魔法、技のみです。更新は不定期です。

プロローグ（前書き）

初めまして二次創作初挑戦です。ネギまメインで行こうと思いますが作者はネギまをほとんど読んでいないので独自設定、オリジナル要素、いろいろな作品のキャラクター、技、魔法が出てきます。更新は不定期です。いたらない点があると思いますがよろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

遠い昔、テザイアという魔神が存在した。デザイアは、悪魔を率い数々の国、様々な並行世界を滅ぼし回っていた。デザイアの悪業を止めようと様々な神がいどんだが、返り討ちにあい被害が増える一方であった。そして、神々は最後の手段として強大な力を持っていたために封印している二人の神の封印を解いた。その封印されていた神は、全てを凪ぎ払う力を持つ神と全てを浄化する力を持つ神。二人は激闘の末にデザイアを倒すことは出来たが、デザイアは最後の力を振り絞り自らを転生させ二人の神に致命傷を負わせた。致命傷を負った二人の神には、自らを転生させる力はなく人間に力と血を継承し亡くなった。

それから数万年とある並行世界から物語が始まる。

プロローグ（後書き）

難しいです。書いてるうちによく分からなくなってきました。駄文ですが感想お願いします。

プロローグ2（前書き）

駄文です。

プロローグ2

プロローグ2

宇宙のような場所で相対する二人。
ひとりは、漆黒の長刀を構え、黒のコートに黒のズボン、容姿は灰銀色の髪に澄んだ青い目顔はかなりのイケメンの好青年。しかし全身傷だらけで血がしたたり落ちている。
相対するもう一方は、漆黒の大剣に全身を覆う漆黒の鎧。鎧はボロボロではあるが目立った傷はない。

「はぁ、はぁ、はぁ」
「フフフフ、どうした人間苦しそうだな」
「くぅ、デザイア貴様だけはたとえ命に代えても倒す」
「ふん、威勢がいいなもう虫の息だろ。くらえ十戒の鎖」

鎖が青年に巻き付き動きを封じる

「う、うごけない。汚いぞデザイア」
「絶望しながら死ね」

デザイアの大剣が青年を貫いた。

「ぐはぁ、ゴホ、ゴホ、フフフフ、」

口から血を流しながら不適に笑う青年。

「貴様なにがおかしい」

「かかったなデザイア」

そう言いながら十戒の鎖を破りデザイアの両腕をつかむ。

「なにをするきだ放せ！」

「これが俺の奥の手だ。オーバードライブ！」

その瞬間二人を中心に大爆発がおきた。

プロローグ2（後書き）

次辺りで主人公の名前を出す予定です。

第1話（前書き）

くだくだで先に進まない。難しいですね。

第1話

第1話

麻帆良学園学園長室

「何者かが結界内に転移してきたのぅ侵入者かのう～」

と妖怪ぬらりひょんこと近衛　近右衛門が一言

「ちょうどエヴァの家の近くか……よしっエヴァに見てきてもらうかのぅ～」

一方その頃エヴァ宅

「何者かが転移してきた侵入者か？」

「ケケケゴシュジンミニイカネェノカ？」

「そうだな」

ちょうどそのときぬらりひょんから念話がきた。

「エヴァ頼みがあるんだが？」

「なんだじじぃ」

「何者かが転移してきたんじゃ、様子を見てきてくれんか？お主の家からが一番近いんじゃ」

「いいだろう。ちょうどいこうと思ってたところだ」

麻帆良学園某所の森

「う…う…ここは」
体を起こし辺りを確認しようとしたが、体中に痛みが走りうまく起き上がれないそれに意識がもろうとする。それでもなんとか起き上がり、辺りを確認しようとした時

「おい」

と声をかけられたので声がしたほうを向くと金髪の美少女が立っていた。

「貴様何物だ！なぜ全身血塗れなんだ！」
「！？」

血塗れと言われたので自分の体を見ると血塗れになっていた。なんで血塗れにと思い出そうとした時、頭に痛みが走りそのまま意識を失った。

麻帆良学園某所

「ん…ん…」

目を開けると

「知らない天井だ」

と一言だれもが一度は言って見たい言葉である。

「お、きがついたようじゃの」
「気が付いたか？」

「ケケケケ」

声がしたほうを向くとそこには妖怪ぬらりひょんと金髪美少女それに人形がいた。

「貴様は何物だ！」

と金髪美少女が威嚇してくる

「まぁまぁ、エヴァ落ち着くのじゃ。初めましてわしは、この麻帆良学園の学園長、近衛　近右衛門という者じゃ」

と妖怪が金髪美少女をなだめながらさり気なく自己紹介をしてくる。

「どうもご丁寧に俺の名前は……」

おかしい名前が出てこない。そのときズキッと軽く頭に痛みが走り名前が出てくる。

「どうしたんじゃ！！」

「いえ、なんでもないです。俺の名前でしたね。皇勇希（すめらぎゆうき）と言います」

「ほれ、エヴァも自己紹介せんかい」

「ち、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

「オレハチャチャゼロダヨロシクナ」

「では早速皇君、どうして君は血塗れじゃったんじゃ？」

「偉い直球で聞いてきますね。俺は……」

思い出せない思い出そうとすると頭痛がする。頭を抱えていると

「どうしたのじゃ？」

「思い出せないです。」
「なんじゃと怪我の影響かのう。まさか記憶喪失か？」
「じじぃだまされるなこれは演技だ！」
「これこれエヴァ落ち着くのじゃ。年齢や住所とかなんでもええなにかわかることはないかのう。」
「年齢や住所ですか？」

さっきより頭痛がひどくなる。思い出そうとすればするほどがひどくなる。

「う…ダメです……思い出せないです。」
「無理に思い出そうとしなくてええ。ふむ、見たところ孫の木乃香と同じ小学生くらいにみえるんじゃが？」
（！？）

声には出さなかったが、小学生くらいに見えると言われ驚き手足を見てみると短くなってる。前の身長などは思い出せないが縮んだことは分かる。

（何で縮んでいるんだ！？）

と自分に問い掛けても答えは出ない。
そんな様子を見て不審に思った三人が

「どうしたんじゃ！」
「どうした！」
「ドウシタ！」

と聞いてくる。
さすがに背が縮んだとは言えないので

「ちょっと疲れました」

と誤魔化す。

「それはすまんかったのう。君の処遇など細かいことは明日にして今日はゆっくり休むんじゃ」

「すいません。休ませてもらいます」

布団に入って目を閉じ意識が落ちる。

第1話（後書き）

だんだん面倒になってきた。次話一気に話しがとぶかダイジェストになるかもしれないですね。こんな駄文ですが感想お願いします。そのうちオリ主の設定のせますね。

第2話（前書き）

相変わらず駄文です。勢い、適当に書きました。内容も進んでいるようで進んでないです。後第1話の内容ちょこっとかえました。

第2話

第2話

ｓｉｄｅエヴァ

じじぃに頼まれ転移反応があった場所に行くと血塗れの少年がいた。
怪しいと思いつつ

「おい」

と声をかける。
少年は振り向きざまに倒れた。
倒れた少年に近づきよく見ると体中傷だらけで顔色も悪い。それに
…。とりあえずじじぃに連絡し連れていく。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　近衛　　近右衛門

ベッドで寝ている少年を見ながら

（う～む酷い怪我じゃいったいどんなめにあったんじゃのう？）

と口には出さずに思う。

「おい、じじぃこいつにはきおつけた方がいい敵かもしれん」
「なぜじゃ？」

「さっきまで魔の気配がした。いまわしないがな」
「ふむ、わしには敵にみえんのじゃが？」
「ん…ここは」

ベッドの方から声が聞こえた。

（気が付いたようじゃのう色々と聞いてみるかのう）

と気が付いたばかりの少年に話を聞く。
どうやら少年の話を聞くと名前以外は覚えてないようじゃ。皇勇希と名乗っておった。皇はて、どこかで聞いた名じゃ。名前からこの子の身元を探してみるかのう

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

次の日、学園長室

「皇君、君の身元と言うかのう両親がわかったんじゃ心して聞くんじゃ」
「はい」
「あぁ、君の両親じゃが亡くなっておった」
「えっ！？」
「皇君がこちらに転移する少し前に何ものかに襲撃されたらしいのう」
「襲撃？それに転移って？」
「君の両親は優秀な魔法使いじゃったんじゃ。わしも何度かあったことがある。おそらく襲撃され君だけを逃がすのがせぇいっぱいだったんじゃ」
悲しかったが涙は出てこなかった。心が妙に冷めていた。人の死に

なれてるのだろうか？自分が怖くなった。
学園長の話が続く
「君の親戚など探してみたんじゃがみんな数年前に亡くなっておってな、君さえよろしければわしのところにこんかのう？」
学園長からの申し出でに
「少し考えさせてください。」
と一言いい学園長室を後にする。
そのまま歩いていると広い広場に出た。ちょうどベンチがあったのでベンチに座り考える。
（どうしようか？学園長の申し出ではありがたい。しかし、自分の両親の死に泣けないし心が冷めてる。両親のことも思い出せない。記憶喪失だし。自分がなにか得体の知れない存在かもしれない）
と悪いことばかり思い浮かび迷惑をかけられないと思うばかり
そんな時
「そんな暗い顔してどうしたん」
声がした方を見るとロングヘアーの女の子がいた
「なんか悩み事があるん」
「……あるよ」
「どんな悩みなん。話せば楽になるかもしれへんよ」
俺はその一言を聞いてなぜか女の子に全てではないが話した。する

と女の子涙を流しながら

「そんな悲しいやん。ウチがかわりに泣いたる」

と言いかわりに泣いてくれた。

その光景を見てるとなんか心が暖かくなり目から頬を伝い何かが手に落ちてきた。

「何や君ちゃんと泣けるやん」

「えっ！？」

俺は目に手をあててみると、目から涙が流れてるのが分かった。

「君家族がいなくなったんやろ？ならウチが家族になったる。ウチは、近衛　木乃香言うんよ。君は」

「俺は、皇　勇希。近衛と言うことは」

「ウチのおじいちゃんここの学園長なんよ」

こうして俺は学園長に引き取られることとした。名字は皇のままにしてもらった。魔法についても教えてもらうことにした。

木乃香に魔法のことは秘密らしい。木乃香の父親が普通の女の子としてくらしてほしいからなのだそうだ。それからなぜか木乃香は俺のことを

「お兄様」

と呼んでくる

「木乃香同い年なのになんでお兄様と呼ぶんだ」

と聞いてみたら

「いやなん」

と上目遣いで聞いてくる。そんな目で見られたら断われないじゃないか、しかし心を鬼にして

「いやじゃないがじいさんに引き取られたから立場的には木乃香の叔父になる」

しかしここであることに気付く。あれじゃあ俺は立場的にぬらりひょんの息子に……。凄く…嫌だ。
そんなことを考えてる俺に木乃香が

「あんなお兄様がいない子はお兄様っぽい人をお兄様って呼んでええんよ」

と言ってきたので
心よく承諾し、立場的にぬらりひょんの息子になってしまったことに現実逃避した。

第2話（後書き）

京都弁難しい。大阪弁みたいになっているようなきがする。それからお気に入り登録ありがとございます。できれば感想の方もお願いします。

第3話（前書き）

オリキャラが出てきます。

第3話

第3話

「プラクテ　ビギ・ナル”火よ灯れ”……」

何もおこらない。

「プラクテ　ビギ・ナル”火よ灯れ”……」

何もおこらない。

かれこれ魔法を習い始めてから一ヶ月一回も成功しない。

才能はあるんだろうか？自信がなくなってきた。

そこえとどめをさすように

「おまえ才能ないなぁ。やめちまえ！」

と言ってくるこいつは横谷　信光。

一応俺に魔法を教えてくれるこの学校の先生・・・ではなく夜の警備員である。

「はぁ、ヤメだヤメここまでだ！俺は今日でおりる。じゃあな」

と言いい行ってしまった。

「はぁ、見放されたか何で成功しないだろう？」

ため息だしながら落ち込む。

（何が原因なのだろうか？）
と悩む。
悩んで悩んだ結果
「図書館島に行くか？あそこは色々な魔導書があるから何か分かるかもしれない。」
と独り言を良い図書館島に向かう。

ｓｉｄｅ横谷

学園長から少年に魔法を教えてほしいと頼まれた。
その少年の名前は、皇　勇希どんな奴か楽しみだ。
いざあってみると中々の美少年それに凄い魔力を感じた。
これは、将来楽しみだと思った。
だがいざ教えてみると魔法が発動しないのだ。
いや正確に言うと、魔法じたいは発動していると思う。だがかんじんの精霊に無視されているというか気付いてもらえてないようだ。
こんなケースはみたことがない。非常に残念だ。冷たいことを言ったが俺にはどうすることもできない。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

図書館島

「こ…っち…」

なんだろう図書館島につてから何かに呼ばれているような気がする。

「…こ…っち…こ…っち…」

まただ何かか呼んでる。
声がするほうへいく。
一冊の古びた魔導書を見つけた。

「全てを極める者。まぁなんかの役に立つかもしれないか？」
「他に…めぼしいのは…無いな」

全てを極める者を持って図書館島を後にする。

自室

「早速全てを極める者を読むかな？」

全てを極める者をひらくすると急に眠くなり意識が落ちた。

「ここは？」
「ここはあなたの夢のなかよ。」
振り向く薄い緑色のロングヘアーの女性、金髪ロングヘアーの女性、いかつい男、いかにも剣士というような格好の男がいた。

「あなたたちは？」
「私たちはこの魔導書の精霊みたいなものよ、私はメルティーナ」
「私はミントです」
「ブラムス」
「俺はクレス」
「どうも俺は「皇　勇希でしょ」はいそうです」
（何で知ってるんだ？）

と内心少し焦る。

「この学園にあなたが来たときから見ていたから分かるわ。魔法がつかえないのもね」

「そうだから」

「私たちの魔法と技」

「教えよう」

上からメルティーナ、クレス、ミント、ブラムスが言った。

「お願いします。」

こうして俺はメルティーナからは攻撃魔法、ミントからは補助、回復、結界魔法、ブラムスからは武術、クレスからは剣術を教えてもらう事になった。

予断だが両親の遺留品から皇流退魔術と皇流剣術という本が見つかった。

読んでみるといくつかの術、技を知っているような気がした。記憶を失うまで習っていたのだろうか？こちらの方も独学でやることにした。ちなみに俺の得物は長刀にした。

第3話（後書き）

またぐだぐだになってしまった。せっかくオリキャラを出しましたが次ぎ以降このオリキャラをだすかは決めてませんので出てこないかも知れません。
それでは感想よろしくお願いします。

第４話（前書き）

仕事が夜勤になったんでしばらく更新出来ないかもしれないですね。
毎度お馴染みの駄文です。また話があんまり進んでないです。

第４話

「ファイヤランス」
「ファイヤーボール」
「魔神剣」
「アイストネード」
「サイクロン」
「プリズミックミサイル」

六人が魔法、一部技を使う。それが一人の少年に一斉に襲いかかる。
それを

「サンダーソード」
「ライトニングボルト」
「魔神剣」
「火炎龍」
「ブリザード」
「レイ」

一人で迎撃する。

＜ど～んバチバチバチ＞

なんとか全部相殺する。

「何で一対多数になってんの？」

「まぁ、そう怒るなよ」
「そうだそうだ」
「普通は怒るだろ！てかおまえ等誰だよ！」
「私はレザード・ヴァレス」
「俺か俺はスタンよろしくな」
「私はアーチェ」
「よろしくってもう時間だ！それじゃまたな」

と言い現実の世界に戻る全てを極める者のマスターになった我らが主人公、皇　勇希。
※補足説明
修行場所は全てを極める者の中です。エヴァの別荘みたいなものです。ただし使えるのは本の声が聞こえる人限定です。中の時間は一時間が半日という設定です。

「誰に説明してんだ」
「説明しないと分からないでしょ」

主人公と作者のやりとり。

ｓｉｄｅ全てを極める者の精霊みたいなものとあいまいなことを言っている集団

「修行を初めて早一ヵ月凄いね。魔法や技を覚えるの早いし、身体能力、魔力、気、桁外れ。」
「才能の塊みたいですね」
「さらにまだ覚醒はしてないけど魔の血を継いでるよ」
「魔の血が目覚めた時魔力と気が倍に跳ね上がる。それを制御できるか分からない」
「やはり血が目覚めないように封じたほうが良いのでは？血が目覚

め暴走した時にまわりにもたらす被害＋体に掛かる負担。とても想像できません」
「たしかに暴走の余波で死んでしまうかもしれん」
「俺達がずっとついててやれば良いが…」
「もう時間があまりないわ」

と上からメルティーナ、ミント、アーチェ、クレス、レザード、ブラムス、スタンそして、最後にまたメルティーナ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そのころ自室にて

「やばい遅刻する」

慌てて学校へ行く勇希。

それから数日後　全てを極める者の中にて

「今日は重大な発表がある」

とメルティーナ

「今日で我らはこの世界から消える」

とブラムス

「消えるってどういうこと！？」

とつかみかかる

それをなだめながら
「一つの世界にいられる期間が千年。今日でちょうど千年目。僕達は別の世界に旅立つ」
とクレスが答える
「何とかできないの？」
「何とかできない。これは契約だから」
「契約？」
「自分達の知識、魔法、技を後世に残すための契約」
「才能がある、正しく力を扱うことが出来ると様々な条件をクリアした人に伝えるために」
「今日この世界を去ることは避けれないの」
「だからまだ教えてない私達の知識、魔法、技をあなたに全て継承する」

その時頭の周りに魔方陣があらわれ痛みが走る。

「イタッ！頭がいたい」
「我慢して今頭に直接たたき込んでるから」
「イタタタタァ！ってちょっとそれって大丈夫なのか？イタッ！」
「大丈夫多分」
「多分って。イタッ！イタタタァ！いつまで続くんだ」
「もう少し…はいおしまい。これからの頑張り次第で使える用になるから」
「頑張って修業してください」
「それとこれは宿題」
すると両手両足には魔法陣浮き出て、体全体には鎖が巻き付き体中

が重くなり、魔力と気が封じられる。

「これは」

「だから宿題」

「これだと今までみたいに動くことが出来ないし、魔力と気がうまく使えない」

「その状態で修行すれば今まで以上に強くなれる。（本当は魔の血が目覚めないようにする強固な封印術だけど）」

「その封印が解けるようになったら一人前だ！」

「わかった。封印が解けるように頑張るよ。」

「もう時間かな？」

とクレスが一言いうと七人の姿が透けて行く。

「さよならは言わないよ。またな」

とクレス

「じゃあ、まったね～」

とアーチェ

「楽しかった。また会おうな」

とスタン

「またな」

と無愛想にブラムス

「頑張ってください。それではまた」
とミント
「また会いましょう」
とレザード
「またね」
とメルティーナ
「ありがとう。そしてまたなみんな」
少し涙ぐみながら七人が消えていくのを見る。
ふと、メルティーナが何かを思い出したかのように
「そうだ忘れるところだった。はいプレゼント」
首にかけてあるペンダントを渡す。
「このペンダントは？」
「お守り大事にしてね」
「ありがとう大事にするよ」
「それじゃまた」
「ああ、また」
そして、七人とも消え周りも真っ暗になり意識が落ちる。

「う…うん。ここは」

目覚めるとベットの上だった。机の上を見ると置いてあるはずの魔導書『全て極める者』がなくなっていた。

「やっぱり行ってしまったか」

視線をしたに落とす。

メルティーナから貰ったペンダントが目に入る。そして新たな決意が胸に宿る。

「よし、あいつらが誇れる弟子にならないとな」

と言い自室を後にする。

第４話（後書き）

次話は一気に話が飛ぶかもしれないです。

第5話（前書き）

初めて感想を貰いました。まだまだ力不足、勉強不足と改めて痛感しました。
相変わらずの駄文ですがどうぞ。

第5話

第５話

メルティーナ達と別れてから数年俺は中学生になった。そして、色々あったそう…色々と…おっと、黄昏いる場合ではない。じいさんに呼ばれてるんだった。じいさんのところに着くまでに色々あったことを話そう。

回想１　毒された茶々丸

あれはじいさんに頼まれてエヴァのところえ届け物を持って行った時のことだった。

＜ピンポーン＞

＜ピンポーン＞

インターホンを鳴らす。

「おーいエヴァ、じいさんからの届け物を持ってきたぞ」

＜タンタンタン＞

と足音の後に

＜ガチャ＞

とドアノブを捻る音中から出てきたのは耳にアンテナの様なものを付けメイド服を着ているガイノイド茶々丸

「よう茶々丸、エヴァは居ないのか？」

「これはこれはお兄様、マスターは今お昼寝中です」

「そうかこれを……ってちょっとまてお兄様ってなんだ！？」

「なんか可笑しいでしょうか？」

と首をかしげながら答える茶々丸。ちょっとかわいいと思ったのは俺だけの秘密だ。

「イヤイヤ可笑しいだろう！なんで茶々丸にお兄様と呼ばれなければならない」

「それはですね」

あっなんかいやな予感がする。前にも似たようなことが……

「木乃香さんが、お兄様がいない人はお兄様っぽい人をお兄様と呼んでいいと言っていました」

やっぱり予感的中！？ここはきちんと言わなければ

「だ「だめなんですか？」めじゃないよ」

俺は陥落した。茶々丸の上目遣い攻撃によって儚く破れてしまったのだ。上目遣いは卑怯だ。もはや最終兵器と言ってもいいだろう。

「木乃香さんの言った通りでした。上目遣いでお兄様にお願いすればＯＫだと」

（木乃香よ茶々丸に何を教えてんだぁ！）

と心の中で叫ぶ

回想１　終了

回想２　どこかで会ったことないか？

俺は中学生になるとともに男子寮に入ることになった。

男子寮入寮当日

これから使う部屋まで行く。部屋のまえにつくと皇　勇希、衛宮士郎とネームプレートに書かれていた。

（…衛宮…士郎…どこかで聞いたことがあるような気がする）

と思いつつ部屋に入ると短髪で赤みがかった茶髪のどこにでもいそうな少年がいた。

なんか懐かしい感じがし、昔からの知り合いのような気がしてならない。

そんなことを思っていると

「初めまして俺は、衛宮　士郎。今日からよろしくな」

と自己紹介してきた。

「俺は皇　勇希。こちらこそよろしく」

とこちらも自己紹介
すると士郎が

「ユウ」

といきなり馴々しくあだ名を付けて呼んでくるが、不思議と違和感が全く無くむしろそう呼ばれて当然と思う自分がいた。

「なんだ士郎」
「俺とどこかで会ったことないか？なんか懐かしいというか昔からの知り合いのような気がして」
「実は俺、記憶喪失で昔のことは覚えてないんだ」
「うっ、それは…すまなかった…」

と申し訳なさそうにする士郎

「きにするな。しかし、士郎も俺と同じ事を感じていたとはな」
「えっ！じゃあもしかしてユウもって本人に許可とる前にユウって呼んでるな俺」
「俺も士郎と呼んだからおあいこだ。それにユウと呼ばれることになんも違和感を感じなかった。まるで昔からそう呼ばれていたようにな」

それからいろんな事を話した。士郎も魔法が使えるらしいが普通の魔法と違ってものを投影する魔法らしい。それしか使えないと言ってたな。そのうち気の使い方を教えてあげよう。

回想２　終了

おっ学園長室に着いたな。

〈コンコンコン〉

あれ

〈コンコンコン〉

可笑しい返事がない

「じいさんお邪魔するよ」

誰もいない

あのじじぃ人を呼んどいて何処に行きやがった！

ふと机の上を見ると置き手紙があった。

「何々、ワシは女子中等部の方にいるだとあのエロじじぃ！！」

俺は手紙を破り捨て転移魔法で女子中等部に向かった。

第5話（後書き）

そろそろネギまの原作に入ろうと思いますが、原作をほとんど読んだ事がないので現在取り寄せ中です。だから次回の更新はいつになるか分かりません。
それと感想をお願いします。

外伝１（前書き）

忙しすぎて中々更新できずすいません。今回は外伝です。士郎の性格がおかしくなってます。

外伝1

外伝1

麻帆良某所

「なぁ、ユウ」
「何だ士郎」
「やっぱ難しいな。全然出来ないんだけど」
「当たり前だ。そう簡単に出来たら誰も苦労はしない」
「まぁ…そうなんだけど…何かさぁ、いきなり出来てもよくねぇ？」
「よくない。」

俺達は今士郎が魔法、俺が技を修得するための修行中。どうしてこうなったかというと

さかのぼること数時間前

「なぁ、ユウ。これみてみろよ」

そう言いながら士郎がマンガを俺に見せる。
そこには魔法使いが二つの魔法を合成して放つ光の矢が載っていた。

「これがどうした？」
「俺この魔法を覚えたい」
「無理だ。寝言は寝てから言え」

「いや出来る。あきらめたらおしまいなんだ。メラ」

《ボゥー》

「あちー、いきなり何するんじゃボケ！」

キレる俺

「後はヒャドを覚えれて合成に成功するだけなんだ！」

「おい、いきなり魔法かましたことについての謝罪はないのか？」

「頼む。どうしてもメドローアを習得したいんだ！修行に付き合ってくれ。それにユウが覚える技もあるから」

人の話を聞いちゃいねぇそれに俺が覚える技とか言ったな

「俺が覚える技ってなんだよ。俺がおまえに付き合って修行する前提なのか？」

「これを見ろ！」

「これを見ろじゃなくて人の話を聞け！」

新たなマンガ見せる士郎

こうなったら何を言っても無駄だ。しょうがない修行に付き合うかな。

「はぁ、わかった修行に付き合うよ。」

と言いながらマンガを見るそこには主人公と思われる人物が『九頭竜閃』と叫びながら九ヵ所を同時に攻撃する技を放っていた。

「おい、まさか…」

「そうだ、そのまさかだ！」
何で自信満々に答えるんだ。
「これは無理だろう」
「いやユウになら出来る」
「何で断言できるんだ士郎？」
「だって三つの斬撃を同時に放つ燕返しができるじゃないか！？」
「俺の燕返しは三つの斬撃を同時に放ってるんじゃなくて、一撃目、二撃目が遅れて当たるように放ちタイミングを見計らって三撃目を当てる。だから正確には三連撃だ！」
「ならその要領で九連撃やればいいだろ！」
「そうはいってもだな」
「修行あるのみじゃ！ヒャド」
何もおきない
「ヒャド」
何もおきない
「ヒャド、ヒャド、ヒャド」
何もおきない。何もおきない。何もおきない。
「何もおきないな。メラの時はどうだったんだ？」
と士郎に聞く
「メラの時はなぜかすぐ出来たんだ！なぜヒャドが出来ないんだ」

「技量不足じゃないのか？」
「技量不足かぁ、まぁいい修行あるのみじゃ！ヒャド、ヒャド、ヒャドォォォォ！」
何もおきない。何もおきない。何もおきないいいいいい。
そして現在に至る。
「そう言えばユウ、九頭竜閃は出来たのか？」
「燕返しの要領でなんとか五連撃までなら同時に当たるようになった。」
「何もうそこまでいったのか？俺もうかうかしてられないぜ！」
と意気込む士郎
数週間後
「ヒャド」
『ポン』
「やった！やっと！成功したぞぉぉぉぉ！これでメドローアが修得できる！」
とハシャギ回る士郎
「やっと入り口に立ったところだな」ボソッ

「あぁん？何か行ったか？」
「いや何も言ってないよ。それより早速やってみたら？」
「おぅ、それもそうだな。ヨシッ！」
気合いを入れながら右手にメラを左手にヒャドを出す士郎。そしてそれを合わせて合成
《バチバチボーン》
爆発した。どうやら合成失敗のようだ。
「おーい、大丈夫か士郎？」
爆発の煙で姿が見えないので声をかける
「両手が焦げちまったぁぁぁ！」
と叫びなが出てくる士郎
「ユウ見てくれこの状態を！」
そこには両手が焦げ、顔が真っ黒、髪がアフロの士郎がいた
「非常におもしろい格好をしているな。ホレ、鏡自分の顔を見てみろ」
鏡を受け取り覗き込む士郎
「な、な、な、何じゃこりゃ！！」

と叫ぶ士郎

「まぁ落ち着け。問題点を上げるとまずあきらかな技量不足だな」
「それなら修行あるのみ！」
「最後まで話を聞け。もう一つ手が焦げないように特殊な素材で作った手袋が必要だ。これは俺がなんとかしよう。それまでメドローア修得を禁止する」
「何で禁止するんだ！」
「あのなやるたびに手が焦げたら手が使えなくなるぞ！」
「う……わかった。その代わり手袋たのむぞ！」
「任せておけ」

それから数日後

「おーい、士郎」
「何だユウ？」
「はい例のヤツ」
「例の…ヤツ…？…？」

メドローア修得に執着してたのに忘れたのか？

「忘れたのか？手袋！」
「おぅ、忘れてないぞ！ただ、中々思い出せなかっただけだ！」

世間一般ではそれを忘れたと言うのではないだろうか？

「まぁいい、早く受け取れよ」
「ありがとうユウ。ヨシッ！修行再開だ！」

「頑張れよ士郎」
「ユウもくるんだよ」
「俺はいいよ。九頭竜閃修得したから！じゃあな」
と右手を上げ立ち去る俺すると
「なん……だぁ……とぉぉぉ！キサマいいからこい！！」
となぜか士郎がキレそして俺の腕を引っ張る
「何でキレてんだよ？」
「うるさいいつのまにか修得してやがって！！いいから修行に付き合え！！」
「わかったわかったから手を放せ。」
「そう言って逃げる気だな。そうは行かないぞ！」
結局腕を引っ張られたまま連行された。
「では早速試してみるか」
と言いながらメラとヒャドを合成する士郎
《バチバチボーン》
やっぱり失敗したな
「おーい、大丈夫か士郎？」
前回同様爆発の煙で見えないので声をかけるすると

「おぉぉぉ手が焦げてないすごいなこの手袋はどんな素材で出来ているんだ？」
と言いながらほぼ前回同様の姿、唯一違うのが手が焦げてないだけの士郎が出てきた。

「素材については企業秘密だ！それとまたアフロになってるぞ（笑）」

「アフロになっていようと関係ない。修行じゃあぁぁぁ！！」

とメドローア修得にはげむ士郎

それからさらに数ヵ月後士郎は無事にメドローアを修得できました。

外伝1（後書き）

メドローア出しちゃいました。士郎は弓が得意なのでありかなとおもい出しちゃいました。それと燕返しは一応オリジナル設定です。また更新がいつになるかわからないですけどよろしくお願いします。

第6話（前書き）

遅くなりました。相変わらず短い&話が進んでないです。

第6話

第6話

麻帆良学園女子中等部某所

「おい、じぃさん呼び出しといて女子中等部にいるとはどういうことだ！」

「まあまあ落ち着くんじゃユウ。木乃香の様子を「覗いていたと」いや違うんじゃ気になるから魔法で見ていたんじゃ！」

自信満々に墓穴を掘るじじぃ。

「世間一般にはそれを覗きって言うんだくそじじぃ覚悟は出来ているんだろうな！！」

「待つんじゃユウこれは孫を思う気持ちが「問答無用！！」ギャャァァァ！」

じじぃに天誅を下す。

「今ここに悪は滅びた」

「滅んでおらん。それに悪じゃないわい！」

「さて、お仕置きが済んだことだし俺を呼び出した理由を聞こうか」

じじぃが何か言ってるが話が進まなくなるので呼び出した理由を聞く

「ひどいワシが「木乃香に言うぞ？」さて、呼び出した理由じゃがな。明日から新任の先生が来るんじゃ」

「それでなんで俺が呼び出されるんだ？」

「立派な魔法使いになるため修行で来るんじゃ」
「本当にそれだけか他に何かあるんじゃないか？」
「あいかわらず鋭いのう実は、その先生はサウザントマスターの息子で年齢が１０歳なんじゃ。だからユウに困ったときに相談にのってもらったりサポートしてもらいたいんじゃが？」

はっ、今何て…１０歳って聞こえたどうやら俺の耳はおかしくなったらしい

「じいさんいまなんていった？」
「相談に「もっと前」ひどいワシが「死にたいのか？」ほんの冗談じゃ。サウザントマスターの息子で１０歳なんじゃ」

どうやら聞き間違いではなかった

「１０歳に教師は無理だろ。労働基準法にも引っかかるし大丈夫なのか？」
「そこはワシがなんとこするし年齢は１０歳じゃが頭のいい子じゃ。その証拠にメルディナ魔法学校を主席で卒業しておる。大丈夫じゃ」

そういうことじゃないんだけどなまあいいか

「サポートといってもどうどうと女子校エリアに行くわけにもいかないだろう？」
「その点は大丈夫じゃホレ」

じいさんから２つ腕章をもらう

「ん…これは、広域指導員の腕章それになぜ２つ？」
「も一つは士郎君に渡しておいてくれんか？コンビじゃからな省く

わけにいかんじゃろ。ついでに説明もおねがいじゃ」
「わかったよじいさん」
「それと明日の朝こっちの学園長室に士郎君と二人で来てくれ」
「了解それじゃ帰るよ」

俺は学園長室を後にする。

（明日から大変だ）

と思いながら

第6話（後書き）

次の更新がいつになるかわかりませんが気長に待っててください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7344j/

神の力と血を継ぐ者

2010年10月8日15時11分発行